

母親の子育て観からみた母子の愛着形成と世代間伝達

—母親像に着目した子育て支援への提案—

Mother-Child Attachment and Intergenerational Transmission in the problem for Views of Child Rearing of Mothers : a Proposition of Child Rearing Support Aimed the Image of Mother

田邊 恭子
Kyoko Tanabe
(田邊絵画教室)

米澤 好史
Yoshifumi Yonezawa
(和歌山大学教育学部心理学教室)

本研究の目的は、現在の母親の子育て観に、母親の持っている自己像や内的作業モデルとの関連性、さらに母親の被養育経験などが、母親と子どもとの関係において愛着形成の世代間伝達が存在するのか、またそこには母親と子どもを取り巻く環境がどのように関与しているのかを検討することにある。予備調査で子育てを終わった母親9名(平均46歳)に、自分の母親と自分そして子どもとの関係性や、夫との関係など直接面接法を行った。本調査では、予備調査の発話と標準化された尺度を基に、131項目のアンケートを3つの施設の母親を対象に質問紙形式で行った。255名の母親から回答得、因子分析と相関分析を行った結果、自分の母親との関係性において安定し受容的な被養育経験を有していたと思っている母親は、安定した自己モデルを持ち、自分の子どもとの関係性においても受容的な関わりができることが示された。自分の母親との関係性に不信感を持ち、情緒的信頼を持ってない被養育経験を有していると思っている母親は、ネガティブな自己モデルを持ち、自分の子どもとの関係に感情的な関わりや、過保護、母子孤立といった不安定で一貫性のない関係性が見られた。実際に自らが過去に経験した被養育経験が、世代を超えて、現在の自分の子どもに対する養育を規定する可能性は相対的に高いと言えるかもしれないが、決して必然的なものではない。問題は、母親がそれをどう認識し受け入れているかということであり、母親の子育てを支援するには、子どもの問題だけでなく、むしろそうした母親の抱える問題を積極的に視野に入れたダイナミックな関わりが必要である。

キーワード：内的作業モデル、愛着形成、世代間伝達、子育て観、子育て支援

はじめに

近年の産業構造の変化・科学技術の高度な発展のため、都市化、核家族化、少子化が進み受験戦争など、母親と子どもを取り巻く環境が目まぐるしく変化している社会の中で、親の子育てが今日あらためて問題となってきた。子育て中の母親は、家事や子育て、いろいろな対人関係、さらには仕事と毎日を忙しく送っているのが現状で、果たして子どもと向き合う余裕があるのか。現在のような工業化社会の子どもは、生まれる前から貴重な子どもとして、両親や祖父母の葛藤や願望の対象になりやすく、親の依存対象となる傾向がみられる(Cramer, B, 1994)。また親子や夫婦で内面を語り合う習慣が乏しい日本では、多くの悩みや葛藤が整理されることなく押し殺されていることも忘れてはならない(渡辺, 1986)。

子どもたちに絵画を指導するようになって25年余りの中で、様々な問題で悩んでいる母親に出会い、支援してきた。絵画教室に通う子どもの中に、母親の顔色をととても気にする子どもや、逆に全く母親の言葉を聞

こうとしない子ども、子どもの事となると一生懸命になる母親、表面は子どもに関わっているように見えるのだが、子どもの言葉を聞いていない母親など、いろいろな形態の母子関係があることに気付いた。

このような様々な子どもと母親の関係はどんなことが要因で形成されるのであろうか。人は愛着対象と自身の関係スタイルを基盤に、新たに遭遇する他者の振る舞いを予測・解釈し、自分自身の行動プランニングを行う。結果的に、愛着対象と自身との関係に近似したスタイルが再生されることになり、さらにそれを通してまた、人はその内的作業モデルを強固にしていくことになる(遠藤1992, 1993)とされている。Bowlby(1969; 1973; 1980)の内的作業モデルによると、人間とは養育者との緊密な愛着関係の中であって、“自分は安全であるという感覚”を絶えず得ようとする傾向こそが人間という存在の本質であり、この安全の感覚に支えられてはじめて健全な心身の発達が揺らぎないものになると論じている。また“自分は安全であるという感覚”を親との関係で持つことが出来なかった子どもは、一時的な認知・情緒的葛藤だけでなく、より

長期にわたる対人的不適応や、自分が親になった時、わが子に対する虐待などの障害を引き起こす背景となり、世代を通して愛着関係が連鎖していくとしている。さらにBowlbyは、内的作業モデルの影響が及ぶと考えた対人関係の中には、自らが養育者になった際の自身と子どもとの関係も含まれると考えた。つまり、母親自らの幼児期の愛着経験が、親になった際の養育行動の質を決めると示唆したのである。そのため子どもは、親自身の過去とほぼ等質の愛着スタイルを身に付けると考えていた。

子どもやその母親と関わる中で、子どもの問題にだけ視点を当てて捉えるのではなく、母親の根底にある自己像、自己モデルと子どもとの関係の関連性、また自己像・自己モデルと自分の母親からの被養育経験との関連性など、いろいろな角度から子育てしている母親を捉え支援していく必要があるのではないかという疑問を抱くようになった。

そこで、本研究では、現在子育て中の母親に子どもへの思いと、実際に子どもとどう関わっているのかを尋ねることとした。対象の子どもが第何子であるかによって母親の対応に違いはあるのか。また母親の子育てには、母親を取り巻く環境要因が大きく影響するであろうと仮定される為、夫や両方の両親の子育てに対する対応に対して、母親自身がそのことをどう感じているのかも尋ねることとした。質問紙の最後に自分の母親から受けた養育経験を、今はどう思っているのか振り返ってもらうことにした。現代の母親の自尊感情や、本来は子どもに使う、内的作業モデルを母親に尋ねることで、母親の自己象のあり方や対人関係の自己モデルが実際の子育てとどのように関連性があるのか、また自身の被養育経験との関連はあるのか、それが自分の母親から自分、そして子どもへと、世代間にどう影響されているのかを検討することにした。母親の就労形態については、働いている母親の親役割満足度が高いことが指摘されている（Gottfried&Gottfried, 1988）ことを踏まえて、働いている母親と無職の母親の親役割満足度を比較し、本研究で就労形態が子育てにどう影響されているかも同時に検討して、その差異を明確にすることを目的とする。

予備調査

自分の子育てを客観的に振り返ることが出来る世代9名の母親（平均48歳）にインタビューを行い、母親と自分、自分と子どもの関係において、今現在どう思っているのか、率直な言葉を集めることとした。興味深いことに、今まで自分の子育てや被養育経験について、ほとんど振り返ることがなかった。また自分の母親や子どもと自分のことをどう思っているのか語り合った経験がなかったということである。その中で、自分の子育てと被養育経験とのつながりや、夫の子育てに対する理解や協力の有無、また両方の両親との関係性などが自分の子育てに影響していることが分かった。

母親・自分・子どもこの3者の関係には何らかのつながりがあること予備調査で確信した。

本調査

方法

予備調査から得た言葉と標準尺度から131項目の質問紙を作成した。現在子育て中のT絵画教室・M保育園・N幼稚園の施設に子どもが通う母親を対象に質問紙形式で行った（Table1-1・1-2・1-3参照）。

Table1-1 分析対象施設の属性

T 絵画教室	73世帯
M 保育園	126世帯
N 幼稚園	56世帯

Table1-2 母親の就労状況(度数)

専業主婦	93	36.5%
自営業	15	5.9%
フルタイム	30	11.8%
パートタイム	99	39.6%
育児休暇	5	2.0%
その他	11	4.3%

Table1-3 家族構成(度数)

夫婦と子ども(核家族)	206	81%
夫婦と子どもと親と同居	24	9%
母親と子ども(母子家庭)	19	8%
母親と子どもと親と同居	4	2%

結果と考察

因子分析 317世帯に配布し255世帯（有効回答率80.4%）から回答を得た。131項目の回答に対し主因子法による因子分析（プロマックス法）を行った（Table 2～8）。

Table 2 質問 1 自尊感情

項目内容	因子1	因子2	共通性
私は色々なところをもっていると思うことがある	.863	.092	.650
私は価値のある人間であると思うことがある	.746	.076	.488
私は私でいいのだと思う	.666	.029	.419
私は自慢できるところが多い	-.622	.118	.496
私は自分に満足している	.599	-.087	.434
私は物事をうまくやり遂げることが出来る	.562	-.128	.426
私は自分自身を尊敬できない	-.400	.308	.414
私は自分は全くだめな人間だと思うことがある	.090	.929	.763
私は何かにつけて役に立たない人間だと思う	-.117	.769	.721
私は敗北者だと思うことがある	.018	.515	.254
固有値	4.318	.748	
寄与率(%)	43.178	7.481	50.659
因子間相関		因子1	-.647

それぞれの因子において因子負荷量が.300基準に、項目を精選した。

質問1自尊感情尺度は今の自分自身をそのまま受け止め自分自身に自信をもっている**自己受容**（a=.854）・今の自分自身に自信がなく、意欲的でない**自己効力感のなさ**（a=.770）の2因子、質問2の内的作業モデルのポジティブな安定した対人関係を有している**安定型**（a=.886）・ネガティブな**回避型**（a=.783）・一定した対人関係でなく不安定な**アンビバレント型**（a=.753）の3因子が選ばれた。

質問3a考えている子育ては「私は子どもといる時間は、しっかりと子どもを見るようにしている」などで子どもを受容し、関わろうとしている思いから**受容一関わり**（a=.771）「私は子どもに必要な情報は、常

Table 3 質問3(a) 考えている子育て観

項目内容	因子1	因子2	因子3	共通性
私は子どもをよく抱きしめるようにしている	.732	-.240	.005	.441
私は子どもにやさしい言葉をかけるようにしている	.713	-.088	.028	.474
私は子どもと一緒に時間を出来るだけ持つようにしている	.676	-.041	.026	.439
私は子どもという時間は、しっかりと子どもを見るようにしている	.622	.165	-.129	.490
私は子どもが何かする時は、一緒にやるようにしている	.565	.116	-.094	.381
私は子どもの気持ちを理解しようとしている	.543	.033	.172	.365
私は子どもがいつまでも私のそばに居てほしいと思っている	.439	-.010	-.116	.192
私は子どもに、私のことをどう思っているのか聞くようにしている	.312	.036	.007	.109
私は子どもに必要な情報は、常に集めるようにしている	.262	.132	.106	.141
私は友達を増やしたいから、子どもの集まりに連れて出席するようにしている	.030	.651	-.129	.413
私は行儀やしつけについて厳しく注意している	-.095	.580	-.081	.281
私は子どものために園の活動(PTAの活動など)は進んで参加している	.205	.429	-.078	.287
私は子どもが決めたことは最後まで自分でやってみようと思っている	-.048	.300	.123	.113
私は子どもにできるだけのことはしてあげたいと思っている	-.009	-.011	.498	.242
私は子どもにあまり口出しはしないように思っている	-.063	.350	.415	.351
私は子どもにあまり期待しないように思っている	-.055	-.055	.377	.135
私は子どもに好きなようにさせたいと思っている	-.001	-.158	.359	.124
私は子育て中でも、仕事や趣味を持ちたいと考えている	.220	.140	.331	.245
固有値	3.387	1.094	.743	
寄与率(%)	18.615	6.078	4.129	29.021
因子間相関		.433	.110	
	因子1			
	因子2		.264	

に集めるようにしている」など子どもに対してポジティブに接しようと思っている子育てに関する積極的行動(a=.602)・「私は子どものことにあまり口出しはしないほうである」など子どもに対して子どもは子どもと距離をとった子育ての放任一相互孤立(a=.714)の3因子が選ばれた。

Table 4 質問3(b) あるがままの子どもとの関係

項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
子どもは誰よりも私のことが好きだと思う	.844	-.070	-.027	.199	.070	.652
子どもは誰よりも私のことを信頼していると思う	.820	.100	-.011	-.040	-.009	.666
子どもが何を考えているか、どうしたいかは誰よりも私が分かっていると思う	.450	-.008	.099	-.156	.035	.305
子どもは私に素直である	.432	.022	-.005	-.286	.187	.372
子どもは私より、父親と仲がいい	-.397	-.016	.113	-.097	.110	.150
私は子どもをほめるよりしかることの方が多	-.141	.629	-.159	.002	-.130	.434
私は子どもがいうことをきかないとイライラする	.011	.611	-.012	.079	-.058	.399
私は子どもにまかせられずに、つい口出しをしてしまう	.085	.602	.110	-.078	.043	.371
私は子どもの欠点がどうしても目についてしまう	-.042	.591	-.165	-.052	.192	.432
私は子どもに問題があるのは自分のせいだと考えている	.070	.373	.052	-.113	.044	.137
私は子どもを育てることがとても大変なことだと感じている	.123	.183	-.073	.104	.162	.098
私は子どもの要求に何でも応えてあげるようにしている	.063	-.071	.645	-.065	.030	.437
子どもが求めるものはそのまま認める	-.024	-.072	.631	-.023	-.082	.373
子どもが怒ったり、泣いたりしている時は、お気に入りのテレビを見せたり、欲しがっているものを買ってあげる	-.121	-.070	.580	.267	.067	.404
私は子どもに良かれと思って、ついかまひすぎしてしまう	.013	.253	.374	-.066	.152	.291
子どもが作業するのが遅いといつまでも待ってられないので全部私がやってあげる	-.041	.279	.329	.064	.081	.264
子どもは私の言うことを聞かない	.000	.200	-.004	.543	-.016	.430
子どもは私に何かをほめるばかり言う	.130	.231	.211	.505	-.087	.433
私は妊娠したことに気づいた時、とても嬉しかった	-.008	.229	-.007	-.453	-.206	.180
私は子どものことが大好きである	.254	.065	.130	-.307	-.137	.232
私は妊娠中、不安になることが多かった	.141	-.067	-.081	.185	.545	.300
子どもは私にあまり話をしない	-.349	.022	.068	.023	.424	.325
子どもは一人で遊んでいることが多い	-.056	.170	.062	-.063	.336	.188
私は一人で外出したいと思うが、子どものこともありできそうにない	-.008	.070	.075	.061	.303	.135
私は子どもより、自分を中心に考えることがある	-.025	.187	-.093	.205	.251	.206
私は子どもを育てることに責任を感じている	.221	-.023	-.051	.005	.240	.097
固有値	3.240	2.366	1.223	.822	.661	
寄与率(%)	12.463	9.100	4.702	3.162	2.541	31.968
因子間相関		-.172	-.020	.249	.038	
	因子1					
	因子2		.299		.165	
	因子3			-.001	.128	
	因子4				.271	

質問3b実際の子育ては、負荷量が.30以下の項目とさらに負荷量が低かった2項目を削除し、残った23項目で一連の作業をもう一度繰り返し行った。「子どもが何を考えているか、どうしたいかは誰よりも私が分かっていると思う」など母親と子どもとの関係に安定した愛着関係が形成されている愛着形成(a=.714)・「私は子どもにまかせられずに、つい口出しをしてしまう」など子ども主体ではなく母親の感情が前面に出た母親主体の子育ての感情的な干渉(a=.674)・「子どもが求めるものはそのまま認める」など母親が子どもを抱え込んでいる子育て過保護(a=.658)・「私は妊娠したことに気づいた時、とても嬉しかった」(逆転項目)など母親と子どもが互いにいい関係性を築くこ

とができていない子ども拒否(a=.528)・「子どもは一人で遊んでいることが多い」など母親と子どものコミュニケーションが希薄な母子孤立(a=.369)の5因子が選ばれた。

Table 5 質問4 夫との関係

項目内容	因子1	因子2	共通性
夫は子どもとしっかりとかわわっていると私は思う	.886	-.019	.774
夫は休みの日は必ず子どもと遊ぶ時間を持っているように私は思う	.823	-.162	.614
夫は子育てに無関心であると私は思う	-.790	.014	.597
夫は子どもとよく話し、子どもの気持ちを大切にしていると私は思う	.776	-.011	.617
夫と子どもとの関係に私は満足している	.753	.018	.577
夫は自分のことが第一で、子どものことは後回しにしているように私は思う	-.733	-.053	.566
夫は私が子育てに困っていると助けてくれていると私は思う	.728	.077	.573
夫は父親としての役割をはたしていると私は思う	.711	.217	.656
夫は私に子どもを任せてすぐにどこかに行ってしまうように私は思う	-.695	.044	.464
子どもが夫のようにならないでほしいと私は思う	-.677	-.139	.540
夫は子どもに厳しいので、子どもは夫のことを好きではないと私は思う	-.625	.249	.349
子どもは夫の言うことを聞かないと私は思う	-.313	-.219	.192
夫は子どもの言いなりになっていると私は思う	.243	-.833	.617
夫は行儀やしつけについては、子どもに厳しくしていると私は思う	.101	.617	.433
夫は家の中で威厳がある存在であると私は思う	.241	.522	.415
夫は子どもの機嫌をとっているように私は思う	.087	-.472	.203
夫婦でゆっくり時間がもてなくて、ものたりないと私は思う	-.025	-.104	.013
固有値	6.672	1.528	
寄与率(%)	39.245	8.988	48.233
因子間相関		因子1	.300
		因子2	

質問4夫との関係で「夫は子育てに無関心であると私は思う」(逆転項目)で夫の子どもに対する対応を肯定的に捉えている育児貢献一肯定的評価(a=.927)・「夫は家の中で威厳がある存在であると私は思う」など夫を家の主と捉え、子どもには威厳を持って厳しく対応しているとしている威厳一厳しさ(a=.683)の2因子が選ばれた。

Table 6 質問5 両方の親との関係

項目内容	因子1	因子2	因子3	共通性
私は夫の親が私の子どもに、いろいろなものを買い与えるのが嫌である	.660	.011	-.066	.440
私は夫の親たちが私の子育てにいろいろ口出しをしてることが嫌だ	.603	-.171	.092	.381
私は私の親が私の子どもに、いろいろなものを買い与えるのが嫌である	.589	-.019	-.089	.354
私は夫の親たちが子どもにいろいろしてくれと、私の立場がなくなるように感じる	.571	-.110	.047	.331
私は私の親たちが私の子育てにいろいろ口出しをしてることが嫌だ	.551	.003	-.162	.327
私は私の親たちが子どもにいろいろしてくれと、私の立場がなくなるように感じる	.541	-.063	.052	
私は子どもが私より私の親と仲がいいように感じる	.422	.124	.237	.278
私は夫の親たちが私の子育てにアドバイスしてくれるのが嬉しい	-.036	.778	.005	.606
私は夫の親たちが子どもにいろいろしてくれて助かる	-.124	.737	-.074	.519
私は子育てで分からないことや、困った時は夫の母に相談する	-.074	.675	-.097	.423
私は子どもが私より夫の親と仲がいいように感じる	.436	.439	-.094	.385
私は私の親たちが私の子育てにアドバイスしてくれるのが嬉しい	.024	.426	.397	.450
私も自分の母のような母親になろうと思う	.004	-.031	.736	.527
私は子育てで分からないことや、困った時は私の母に相談する	.084	.046	.712	.539
母は母、私は私、子どもは子どもと割り切って考えていると思う	.113	.149	-.510	.246
母の育て方とは関係なく、私自身の育て方をしていると思う	.035	.154	-.482	.210
私は私の親たちが子どもにいろいろしてくれて助かる	-.074	.201	.417	.272
母と私と子どもどこか、似ているところがあるように思う	.037	.001	.190	.038
固有値	2.704	2.482	1.433	
寄与率(%)	15.022	13.787	7.962	36.771
因子間相関		因子1	.056	.014
		因子2		.323

質問5の両方の親との関係では「私は私の親たちが子どもにいろいろしてくれと、私の立場がなくなるように感じる」など夫の親からの支援やアドバイスに抵抗を感じるだけでなく、母親自身の親からの支援・アドバイスに対しても受け入れられないことと、それが自分の立場を脅かす要因ではないかと、両方の親に脅威を抱えている両方の親からの支援一アドバイスの拒否一脅威(a=.747)・「私は子育てで分からないことや、困った時は夫の母に相談する」など、夫の親からの支援・アドバイスに対して肯定的に受け入れている夫の親からの支援一アドバイスの教授(a=.760)・

「母は母、私は私、子どもは子どもと割り切って考えていると思う」(逆転項目)と自分の母親からの支援を受け入れ、自分の母親と自分を重ね合わせている私の親からの支援と同一視(a=.702)の3因子が選ばれた。

Table 7 質問6 母親との関係

項目内容	因子1	因子2	因子3	共通性
母は私の話を良く聞いてくれたように思う	.821	-.017	-.047	.679
母は私にいろいろなことを教えてくれたように思う	.808	.083	-.018	.662
母は私が喜ぶことをしてくれたように思う	.802	.033	.076	.648
私は母のことが大好きであったと思う	.766	-.077	.217	.620
母は忙しいのに私にいろいろしてくれたように思う	.745	.188	-.084	.599
母は私の気持ちを分かってくれたように思う	.716	-.208	.128	.553
母は私と何をしても一緒にやってくれたように思う	.618	.163	-.164	.434
母は私のことを信じていなかったように思う	-.568	.243	.058	.399
私は困ったときは母より父や祖父、祖母に頼っていたと思う	-.354	.150	.009	.148
私は母の私に対する子育てに関して考えたことがなかったように思う	-.240	.038	.029	.061
私は母の言うことには従うしか仕方がなかったと思う	-.168	.795	.049	.675
私は母にどう思われているのか気になっていたように思う	.031	.651	.073	.449
母は私のことに関するさく口出しをしてきたと記憶している	-.192	.637	-.002	.439
私は母が私ができる前に先に何でもして嫌だったと思う	-.219	.577	-.019	.374
私は私に期待することが多かったように思う	.071	.561	-.072	.311
私は母に気に入られるようにしていたと思う	.264	.507	.203	.408
母は行儀やしつけに厳しい人であったように思う	.278	.434	.014	.271
私は母が仕事で出かけることが淋しくて嫌だったと思う	.004	.034	.664	.451
私は母にいろいろかまってくれなかったと思う	-.157	.041	.589	.388
私は母とゆっくりと話しかかったと思う	.010	.163	.530	.340
私は母にそばにいてほしいと思ったことがなかったと思う	-.176	.038	-.342	.141
母は必ず家に居て私を「おかえり」といって迎えてくれたように思う	.334	.239	-.336	.260
固有値	4.951	3.035	1.312	
寄与率(%)	22.506	13.796	5.962	42.265
因子間相関				
	因子1			
		因子2		
			因子3	
				.194

質問6 自分の母親との関係で「母は私が喜ぶことをしてくれたように思う」など子どもの頃母親に愛情豊かに関わってもらったことで、自分の母親を信頼し、自分のことを理解して受け入れてくれたと思っている情緒的信頼—支持(a=.886)・「私は母が私ができる前に先に何でもして嫌だったと思う」と、子どもの頃自分の母親の思いに服従しそのことに不信感を持っていた支配的強制—不信(a=.791)・「私は母とゆっくりと話がしかかったと思う」で、かまってもらいたかった寂しい思いやり、あきらめている心情の関わり不十分—孤独(a=.621)の3因子が選ばれた。

Table 8 各因子の平均評定値

		平均値	標準偏差	N
質問1 自尊感情	自己受容	3.44	0.71	253
	尺度	2.21	0.86	253
質問2 内的作業	自己効力感のなさ	3.62	0.81	254
	モデル	2.82	0.69	253
質問3A 考えている子育て	安定型	3.04	0.75	254
	回避型	3.69	0.59	186
質問3B 実際の子	アンビバレント型	3.26	0.79	186
	第1子	3.47	0.55	185
質問3B 育て	第2子	3.63	0.57	128
	第3子	3.08	0.62	128
質問4 夫との関	受容・関わり	3.47	0.57	126
	子育てに関する積極的活動	3.72	0.67	47
質問5 両方の親との関係	放任・相互孤立	2.85	0.74	47
	過保護	3.52	0.60	47
質問6 自分の母親との関係	愛着形成	3.71	0.67	186
	感情的な干渉	3.20	0.67	186
質問6 親との関係	過保護	2.63	0.57	186
	子ども拒絶	1.93	0.55	186
質問6 母親との関係	母子孤立	2.66	0.83	186
	愛着形成	3.83	0.67	125
質問6 母親との関係	感情的な干渉	3.21	0.65	125
	過保護	2.66	0.59	125
質問6 母親との関係	子ども拒絶	1.94	0.52	124
	母子孤立	2.49	0.80	124
質問6 母親との関係	愛着形成	3.82	0.70	46
	感情的な干渉	3.09	0.70	47
質問6 母親との関係	過保護	2.69	0.66	47
	子ども拒絶	2.03	0.58	47
質問6 母親との関係	母子孤立	2.35	0.85	47
	愛着形成	3.86	0.86	254
質問6 母親との関係	感情的な干渉	3.75	0.81	254
	過保護	2.05	0.70	254
質問6 母親との関係	子ども拒絶	2.86	1.11	253
	母子孤立	3.18	0.70	254
質問6 母親との関係	愛着形成	3.69	0.84	252
	感情的な干渉	2.52	0.79	252
質問6 母親との関係	過保護	3.13	0.83	252
	子ども拒絶			

相関分析 因子間の相関分析から、質問1 自尊感情尺度の自己受容・自己効力感のなさの2因子、質問2の

内的作業モデルの安定型・回避型・アンビバレント型の3因子が、さらに質問6 自分の母親との関係の情緒的信頼—支持・支配的強制—不信・関わり不十分—孤独3因子が、他の因子と密接に関連していることが証明された。

自分の母親との関係性において安定し受容的な被養育経験で情緒的信頼—支持を有していたと思っている母親は、自己受容・安定型と有意な正の相関、自己効力感のなさ・回避型・アンビバレント型と有意な負の相関がみられた。自分の子どもとの関係性においても受容—関わり・愛着形成と有意な正の相関、子ども拒否と有意な負の相関があり、夫との関係で育児貢献—肯定的評価・威厳—厳しさと両方の親との関係の私の親からの支援—同一視と有意な正の相関があった(Table 9)。

自分の母親との関係に信頼と支持という安定した愛着関係を持つことができた母親は、自分自身に自信を持ち、自己を受け入れる事ができていた。対人関係においても安定した内的作業モデルを有していることが証明された。これは自分自身を受け入れ信じてもらった経験があると、自分自身や他者を信じ、安定した関係性を築くことができると言えよう。内的作業モデルの対人関係だけでなく、自分の子どもとの関係においても、子どもを受け入れ、愛着形成が成される関係性を築くことができていた。このことから世代間に愛着形成のつながりがあることが本研究からも証明された。

逆に自分の母親との関係性に不信感を持ち、自分の母親が主体で自分自身を受け入れてもらえなかった被養育経験、支配的強制—不信を有していると思っている母親は、ネガティブな自己モデル回避型・アンビバレント型と有意な正の相関、自分の子どもとの関係に放任—相互独立・過保護と有意な正の相関、さらに両方の親支援—アドバイス拒否—脅威と有意な正の相関、母親との関係の関わり不十分—孤独と有意な正の相関があった。このように自分の母親に不満や不信をもった被養育経験であったと思っている母親は、不安定で一貫性のない自己モデルを有し、子どもとの関係だけでなく両方の親との対人関係においてもいい関係性を築くことができていない現状が見られた。

関わり不十分—孤独の因子は、支配的強制—不信と有意な正の相関、子育てに関する積極的活動と有意な負の相関だけで他の因子との関連性はなかった。自分の母親に支配されたり不信感を持っている母親は、子育てに関して関わり不充分という、いいモデルを自己モデルの中に持つことが出来なかったため、子育てにおいてもいい関わりをすることが出来ないでいる。

Grossmann et al. (1988) は、早期される自らの被養育経験の質が否定的なものであるにもかかわらず、現在安定した内的作業モデルを有し、自分の子どもに対して感受性豊かな対応ができている親の存在に気付く関心を示した。支持的な親を有し、外傷体験を持たない母親であれば、かなりの確率で愛着に関して良好なモデルを形成し、子どもとの間に安定した愛着関係

Table 9 因子別平均値の相関係数

[illegible]

を持つ事ができるとし、不幸な愛着経験を有する母親が、現在の愛着関係に否定的な影響を及ぼし、過去の不幸を繰り返していく訳ではないことを示唆した。本研究からも、母親からの養育経験だけで、自己像・自己モデルが確定するのではなく、その後の様々な要因が影響し少しずつではあるが愛着関係は変革していくことが証明された。

また母親を取り巻く環境で、因子相関と分散分析を行った結果。就労形態で専業主婦は子どもとの**受容一関わり・愛着形成**の相関係数が小さくなっていた。これは子どもとの時間が他の母親より多いにもかかわらず、子どもを受容し、安定した愛着関係を築けているのか疑問である。夫との関係において他の母親に比べて**育児貢献一肯定的評価・威厳一厳しさ**の係数が低く相関が見られなかった。専業主婦は夫との関係においても、希薄は関係性と言えるのではないか。また被養育経験の**支配的強制一不信**の相関係数が高く、**両方**の親からの**支援一アドバイスの拒否一脅威**の係数も高くなっている。自分の母親に不信感を持っているということが、他の対人関係にも不信感を抱いてしまうというパターンを内在化してしまい、他者との関係性を上手く築くことができないでいる。活動範囲の狭い専業主婦は、子どもと自分だけの生活が中心で、周りが見

えない、見ようとしめない傾向があり、夫との関係で希薄でいい関係性が持てていないことに対して、小坂（2004）は、専業主婦と言うことに母親本人が納得していないのではないかと指摘している。またBeyer（1995）は、専業主婦における自己評価や自己効力感の低さは、孤独や余り子育てに魅力を感じていないのにやらないといけないう感情の為かもしれないと考察している。このことから母親が仕事を持つという要因が、子どもとの関係に大きく影響されることは確かなことと言える。

分散分析 一元配置の分散分析から、就労形態でフルタイムの母親は子どもに関する積極的活動の係数が他より高く、愛着形成で育児休暇の母親より高い有意な傾向〔F (.5,180) = 4.78, $p < .01$ 〕と過保護でパートタイムの母親より高い有意な傾向〔F (.5,180) = 1.96, $p < .10$ 〕となっていた。子どもと居る時間が少ない分、他の母親より一生懸命に関わろうとする姿がみえるが、関わり過ぎで過保護になってしまう傾向があると証明された。

家族構成においては、質問4 夫との関係の育児貢献一肯定的評価で、核家族と夫婦と子どもと親と同居が母子と他の家族より高い有意な差がみられた [F

Table10 就労形態の平均評定値

子育てに関する積極的活動	専業主婦	75	3.48	0.69
	自営業	12	3.67	0.88
	フルタイム	26	3.29	0.84
	パートタイム	63	2.98	0.75
	育児休暇中	4	2.92	0.42
	その他	6	2.61	1.08
	合計	186	3.26	0.79
愛着形成	専業主婦	75	3.70	0.65
	自営業	12	3.55	0.68
	フルタイム	26	3.85	0.69
	パートタイム	63	3.74	0.67
	育児休暇中	4	2.80	0.59
	その他	6	3.87	0.72
	合計	186	3.71	0.67
過保護	専業主婦	75	2.60	0.50
	自営業	12	2.57	0.64
	フルタイム	26	2.94	0.62
	パートタイム	63	2.56	0.61
	育児休暇中	4	2.75	0.19
	その他	6	2.37	0.34
	合計	186	2.63	0.57

(.3,250)=4.10,p<.01]。質問6 母親との関係の**情緒的信頼・支持**では、核家族が母子家庭でより高い有意な差があった[F(.3,248)=3.29,p<.05]。結果から、夫との関係で夫と子ども以外の家族がいる大家族で、肯定的に夫を評価することが出来ている。大家族では夫と何かトラブルがあった時、誰かがクッションの役割りを担ってくれるので、夫との関係性がうまくいくのではないだろうか。また核家族の母親は、自分の母親から受けた情緒的信頼や支持をエネルギーに、自分ひとりで子育てを頑張ろうとしている母親の姿が見られる。母と子そして自分の母親と住んでいる母子家庭の母親からは、自分の母親との絆が強すぎるのが要因で、他者である夫との関係性をうまく築くことができなかったからであろうと推し量ることが出来る。

Table11 家族構成別の平均評定値

育児貢献・肯定的評価	夫婦と子ども[核家族]	208	3.90	0.80
	夫婦と子ども・親と同居	24	3.97	0.69
	母と子ども(母子家庭)	18	3.42	1.24
	母と子ども・親と同居	4	2.79	1.50
	合計	254	3.86	0.86
情緒的信頼・支持	夫婦と子ども[核家族]	207	3.76	0.82
	夫婦と子ども・親と同居	23	3.52	0.76
	母と子ども(母子家庭)	19	3.17	0.98
	母と子ども・親と同居	3	3.70	0.80
	合計	252	3.69	0.84

施設別では、T絵画教室に子どもが通う母親が、**支配的強制—不信**がM保育園とN幼稚園より高い有意な差があった。一元配置の分散分析[F(.2,249)=7.94,p<.01]であった。さらに**子育てに関する積極的活動**で、M保育園より高い有意な差が[F(.2,183)=5.25,p<.01]であった。第3子の**過保護**で、M保育園より高い有意な傾向があった[F(.2,44)=3.209,p<.10]。自分の母親への不信感が根底にあることから、自分の子どもに関して積極的に活動しているのだが、子どもの思いをしっかりと受け止めているかは問題で、母親の自己満足のために、母親誘導の子育てになっていると言える。M保育園の母親は、子どもの**受容—関わり**で、T絵画教室より高い有意な差があった[F(.2,183)=6.16,p<.01]。**愛着形成**で、T絵画教室より高い有意な差があった[F(.2,183)=3.74,p<.01]。**子ども拒絶**で、T絵画教室より高い有意な差

があった[F(.2,121)=8.30,p<.01]。**母子孤立**で、T絵画教室より高い有意な差があった[F(.2,121)=4.34,p<.01]。夫の親との関係においても**夫の親からの支援・アドバイスを拒否—脅威**で、T絵画教室より高い有意な差があった[F(.2,250)=7.38,p<.01]。子どもとの関係においては両極面を持っている。これは母親ひとりが子育てに責任を持たなければいけないという思いが強く、周りの声が聞こえなくなり母親が孤立し頑張りすぎの子育てになっている現状がみられた。N幼稚園は際立った特徴がなく中庸であった。

分散分析の結果、第1子・第2子・第3子の違いによる主効果が**子どもに関する積極的活動**で、第1子が第3子より高い有意な差[F(2,356)=4.05,p<.05]があった。**母子孤立**で、第1子が第3子より高い有意な差があった[F(2,354)=3.54,p<.05]。第1子は、母親にとって初めての子どもの子育ての経験が少ない為、できるだけのことをしてあげたいと思う母ごころが強いからであろう。**母子孤立**で第1子と第3子の間に差が見られたのは、第1子の度数184のうち74が一人っ子であることが、大きな要因ではないか、ひとりの子どもと母親の関係性が強固で、母子一体の関係が強いと言える。

他に一つの因子を目的変数とし、他の20の因子をそれぞれ説明変数とし重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。さらにそれぞれの下位尺度得点を従属変数とし、就労形態と家族構成、施設別、第1子・第2子・第3子の違いをみる為に一元配置の分散分析を行い同様な結果が導き出された。

重回帰分析 重回帰分析(Figure1～8)から、質問1 自尊感情尺度の**自己受容・自己効力感**のなさの2因子に母親の被養育経験からの**情緒的信頼・支持**の有意な寄与があった。**自己受容**には**正の寄与**が、**自己効力感**のなさには**負の寄与**があった。他にも内的作業モデルの**安定型・回避型・アンビバレント型**の寄与も証明された。

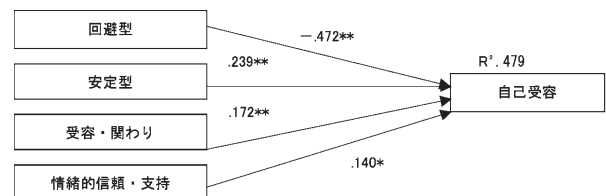


Figure 1 <自尊感情>

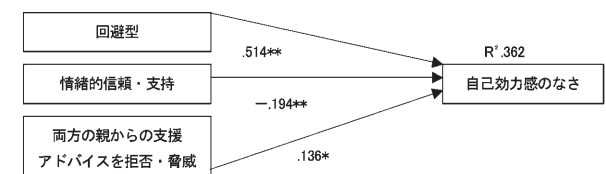


Figure 2 <自尊感情>

対人関係において安定し感受性や応答性が高いと、

自分自身のあるがままの姿を受け入れ、自信を持つことができるという結果が出た。自分の子どもとの関係においては、子どもの気持ちを理解し受容しようとするポジティブな関わりの影響も受けている。さらに被養育経験で自分の母親から情緒的信頼と支持を受けていたと認識していることの影響を受けていることが明らかになった。さらに、内的作業モデルの回避型がネガティブな情動を持って、孤立する傾向に負の影響を受けている。ここで自分の母親や、自分の子どもとの関係で肯定的な安定した関係性が持てているということは、自分自身に対しても自信が持てると言うことに寄与していることが証明された。安定した情緒的信頼関係のもと自分を受け入れ支持してくれた経験を持っていると、自分自身を肯定的に受け入れることができると言うことである。

逆にネガティブな情動を持って、孤立する傾向は、物事に対して意欲を持つことができにくいことに寄与していた。自分の母親から情緒的な安心感を受けた認識がない被養育経験を持っていると、自分に自信が持てない自己効力感のなさや寄与していることも証明された。さらに、現在自分の親からだけでなく、夫の親からの支援やアドバイスを拒否し、親と自分と子どもとの関係に不満を抱いている傾向は、自分に自信が持てない不安定な心情に影響しているということも証明された。

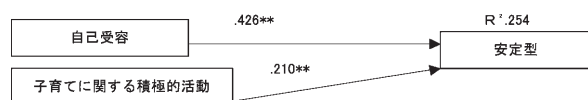


Figure 3 <内的作業モデル>

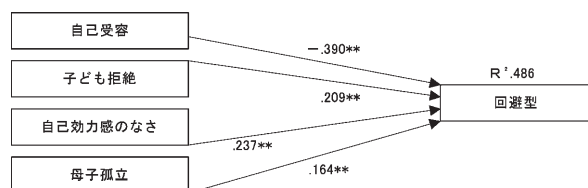


Figure 4 <内的作業モデル>

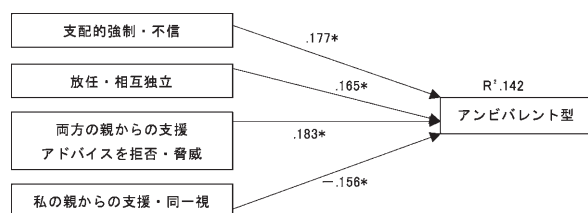


Figure 5 <内的作業モデル>

内的作業モデルの安定型に自己受容が有意な正の寄与が証明され、子育てに関して積極的活動が有意な正の寄与と証明された。自分自身を受け入れ、自信を持っていることは、対人関係においてもポジティブな情動で働きかけ、共感的行動を多く示すことができる安定型であることが証明された。また子育てに関して積極的にポジティブに接しようと思えるということは、

安定した自己を持てていると証明された。内的作業モデルの回避型に、自己受容と有意な負の寄与があった。さらに子ども拒絶・自己効力感のなさ・母子孤立の正の寄与があった。このことから自分自身に自信を持つことができないだけでなく自己効力感を持っていないことは、対人関係においても不信感を持ち、ネガティブな情動をもって、孤立する傾向があることを証明している。自分の子育てに関しても、拒絶的で愛着のシグナルを最小限に押さえ込む、子ども拒絶や母子孤立と関連があり、子どもとの関係において安定した愛着関係を築くことができないことを証明している。内的作業モデルのアンビバレント型に、自分の母親からの支配的強制・不信、子育ての放任・相互独立・両方の親からの支援・アドバイスを拒否・脅威が有意な正の寄与が、さらに私の親からの支援・同一視に有意な負の寄与があった。自分の母親から支配的強制を受け、母親を信じることができないと、不安定で気まぐれな、行動に一貫性が認められないアンビバレントな自己モデルを形成することが証明された。自分の子どもに対して放任的で、自分と子どもが互いに距離があるような子育て観を持っているとも言える。

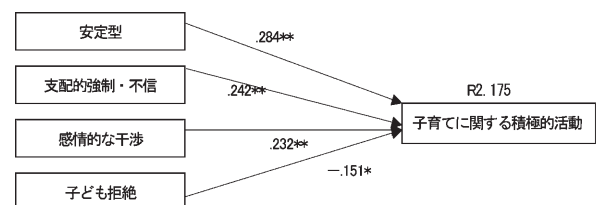


Figure 6 <母親の子育てに関する考え方>

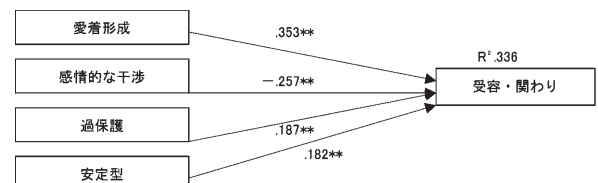


Figure 7 <母親の子育てに関する考え方>

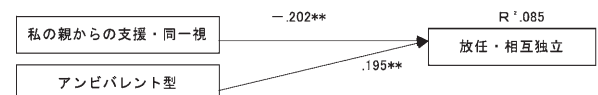


Figure 8 <母親の子育てに関する考え方>

母親の子育てに関する考え方の受容・関わりに、愛着形成・過保護・安定型が有意な正の寄与があり、感情的な干渉に有意な負の寄与が証明された。

自分の子どもとの関係においては、関係性を築き安定した内的作業モデルを有しているということは、子どもを受け入れ、ポジティブに子どもと関わろうという思いを持っていると言える。また子どもに感情的に干渉するのではないが、子どものことが気になってしかたがないことも、子どもを受け入れ関わるができることに寄与していた。安定した対人関係のモデルを持っていると、子育てに対してポジティブに行動す

ることができるが、自分の母親に対して、支配的な強制を受け、自分の母親に不信を抱いている母親が、自分の子どもには自分が体験したような養育体験をさせないよう、積極的に関わろうとしていることも証明された。

感情的な干渉が子育てに関する積極的活動に有意な正の寄与、子ども拒絶もまた子育てに関する積極的活動に有意な負の寄与があると言うことは、子ども主体というより自分が主体に子育てを行っていると言えるのではないか。

放任・相互独立に、私の親からの支援・同一視が有意な負の寄与があり、アンビバレント型が有意な正の関与があった。これは自分の母親のような母親になりたくないし、今現在自分の母親に自分の子育てに関わってほしくないと思っていることは、自分の子どもとの関係では、子どもは子ども、自分は自分と割り切って考えていると言えるのではないか。不安定で気まぐれで、行動に一貫性が認められないアンビバレントな自己モデルを有していると、子どもに対して放任的であまり執着しない子育て観を持っていることが証明された。

本研究から、自分の母親との関係が自己像・自己モデルに大きく影響されていると証明されたが、質問6自分の母親との関係で**関わり不十分・孤独**の因子がどの因子からも有意な寄与がなかったことや、負の要因としてダイレクトに被養育経験が自分の子どもに影響されるということは証明されなかった。これは母親自身が成長するプロセスで環境の変化や、認知の変革(内省的自己)などにより、自己像や内的作業モデルの塗り替えが可能であると言えるであろう。負の遺産の世代間伝達はダイレクトには、必ずしも存在するとは、本研究からは証明されなかった。しかし、ある自己像との関係で世代間伝達が起こる可能性はあり、更に詳しく探求する必要がある。

まとめ

本研究の成果 本研究より、親の愛着表象・自己モデルと子どもとの愛着関係の間に特異的な関連性があることが証明された。母から子ども、そしてその子どもへと、愛着表象の伝達は確かに存在した。しかし、親子を取り巻く環境や、母親自身の気持ちの有り様で世代間の連鎖を断ち切ることも可能であることも証明された。母親と子どもの関係性には、母親の自己像、自己モデルや母親の置かれている環境の違い、夫や両方の親との関係だけでなく、被養育経験のあり方がその基盤となっていることを、本研究から立証された。世代間の関連性や連鎖があることを、母親と子どもの関係を考えるうえで重要な要因であると言える。

これらのことから、子育てで多くの悩みや葛藤を持っている母親を支援する者にとって、現在の母親の姿だけに着目したサポートではなく、母親の被養育経験や母親を取り巻く様々な環境を視野にいたしたサポート

が必要である。

先行研究に、母親がどれだけ記憶や感情を正の面、負の面併せて統合できているか、愛着に関する情報に防衛的にならず、どれだけ容易にアクセスできるか(Main et al,1985; Grossmann et al,1988)、あるいは愛着に関していかにメタ認知能力や内省能力を働かせることができるかということ(Fonagy et al,1991b; Main,1991)なのではないかという見解がある。人間とは生まれ持った特性と育った環境に大きい影響を受け、ほぼ幼少期に自己を築くといわれている。しかし成長する過程において、多くの人と出会い、結婚、出産などいろいろな経験を重ね、自己を振り返り内省することで、次の世代にネガティブな要因を伝援する可能性はそう大きくないと言える。Fonagy, P (1991)は自己のありのままの実態をしみじみと振り返る姿勢を、内省的自己(reflective self)と呼び、内省的な自己は精神病理の世代間伝達を防ぐ可能性をもつことを明らかにした。しかしどのような状況で、こうした自己モデルの統合が出来るのかが問題である。Main et al (1985)、Fraiberg et al. (1975)等の学者たちは、ある時点で親以外との支持的で暖かい関係を享受することや初期のモデルとは根本的に異なる際立った情緒的体験をすること等の重要性を指摘している。これまでは、内的作業モデルの形成過程において、被養育経験の果たす役割りだけが強調されて、他の要因の意味がほとんど問題にされなかった。Main et al. (1985)やRicks (1985)は、思春期、青年期の形成的思考の発達に自己モデルの再構成の機会を与えることを示唆している。またWinnicott (1968)、Fogel et al (1986)小嶋 (1989)などが、乳幼児期の親との実体験だけでなく、親が他の子どもに接する場面を見たり、弟妹などの年少の子ども世話をしたりが自己モデルの構造に関与しているであろうと仮定している。

確かに親の愛着表象・自己モデルと子どもとの愛着関係の間に特異的な関連性があることが本研究で証明されたが、これが本当の意味での世代間伝達と言えるのだろうか。母から子ども、そしてその子どもへと、愛着表象の伝達のメカニズムがどのようなものなのかまでは、はっきりと解明されなかった。しかし自分の被養育経験をどう受け止め、それを自分の中でどう内在化していくかが重要で、このことが現在の母親の生き方や、子育てに大きく関与していることは、本研究で証明された。

子育てに悩む母親の葛藤の世代間伝達を防ぐには、子どもとの関係だけでなく、夫や両方の親など他の対人関係、そして母親の被養育経験も含めた広い視点が重要で、母親自身が自己を振り返る内省的自己、自己修復力を育てる支援が、これから求められる新しい子育て支援のあり方ではないか。

子育てへの提案 現在、子育てをしている母親にとって、今の自分、自己を振り返る余裕が日々の生活の中

で、殆どなく、知らず知らず無意識のうちに、子どもにかけ言葉やしぐさ、表情などが自分の母親から受けた被養育経験と似たスタイルになってきているということが、本研究から証明された。母親の持つ自己像・自己モデルが被養育経験の影響を受け形成され、それが自分の子どもへの関わり方に大きく寄与している。母親が置かれている環境も、母親の意識、感情に大きく影響するということも忘れてはならない。しかし人間とはすばらしい力を持った生き物で、たとえネガティブな被養育経験を有し、不安定で自分自身に自信が持てなくとも、自分の母親以外のさまざまな対人関係を経験し、成長していくプロセスにおいて、ネガティブな自己像、自己モデルを、受容的で肯定的な安定した自己モデルに変容できるということも本研究から考えられた。

子どもの問題にばかりに目を向けるのではなく、母親自身が自己の問題に気づき、自分自身を見つめ直す機会を持つことで、子どもとの関係性を安定したものにし、子どもの問題が緩和されていくのである。子どもに関わる者として、子どもにだけのサポートではなく、母親の持つ悩みや葛藤に共感し、母親の自己を振り返る、内省的自己へのサポートがいかに重要であるか認識しておく必要がある。

過去に何があったかということの記憶（内的作業モデルの内容的側面：Crittended, 1990）よりも、それをどう解釈し、統合しているかという内的表象モデルの構造的整合一貫性（Main, 1991）が現在の関係性を規定するとしている。愛着に関する内的作業モデルは、単なる過去の被養育経験の写しではない、その経験を単にそのままの形で取り込んだものではないというところに、不連続性の可能性が存在すると言えよう。表象モデルの力動的統合ができれば、関係性の崩壊は繰り返されないということである。現在の母親自身と子どもとの相互関係、現在の自分の母親との相互関係の中で、ダイナミズムな作用が働くことで、被養育経験での自分の母親への思いを肯定的なものに変えていくことも、不可能ではないのである。

近代化社会において、核家族化、少子化が進み、家族や地域社会の養育機能の低下から、子育てをひとりで背負い、回りが見えなくなっている母親が増えている。このような多くの問題を抱えた現在の子育てには、母親の思いを共感し、安定した信頼関係が持てる第三者である支援者の存在が求められる。母親から子ども、そしてその子どもへと、世代を通し正の面、負の面と多くのことが伝達されていく。この世代間においての相互の関わりの中で、子どもや母親をサポートする者は、本研究で証明された自己像、自己モデルがどのようにその人の対人関係や、子育て、生き方に影響を及ぼすかを認識した上で、子どもと母親の両方の問題に目を向け、色々な角度から問題と向き合う広い視野を持って、今その親子に何が問題で、何が重要かを見極めることが必要である。支援者が母親に関わることで、自分の母親像が変わったり、現実の母親への思いや、

子どもへの思いが変化したりと、母親を通して親子の関係性に変容していく。また支援者が母親と関わる経験において得ることも多く、支援者として成長する大切な要因となることも忘れてはならない。母親の抱える問題を多面的に捉える視野を持ってダイナミックに関わることが支援者に求められる要因であろう。

引用文献

- Bowlby, J. 1969/1982 Attachment and loss : Vol. 1 Attachment. New York : Basic Books.
- Bowlby, J. 1973 Attachment and loss : : Vol. 2 . Separation.. New York : Basic Books.
- Bowlby, J. 1980 Attachment and loss : : Vol.3. Loss.. New York : Basic Books.
- Cramer, B., Profession Bere（小此木啓吾監修：赤ちゃんの精神療法。朝日出版、1994）。
- Crittenden, P. M. 1990 Internal representational. models of Attachment relationships. Infant Mental health Journal. 11. 259-277.
- 遠藤利彦 1992 愛着と表象—愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観—心理学評論、35, 201—233.
- 遠藤利彦 1993 内的作業モデル愛着パターンの世代間伝達、東京大学教育学部紀要、32, 203—220.
- Fogel, A., Melson, G. F., & Mistry, J. 1986 Conceptualizing the determinants of nurturance : A reassessment of sex differences. In A. Fogel & G. F., Melson (Eds), Origins of Murturance. Hillsdale : Lawrence Erlbaum Associates.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Moran, G. S., & Higgitt, A. C. 1991 The capacity for understanding mental states : The reflective self/ parent in mother and child and its significance for security of attachment, Infant Mental Health Journal, 12, 201-218.
- Fraiberg, S., Adelson, E., & Shapiro, V, 1975 Ghosts in the nursery : A psychoanalytic approach to the problems of impaired infant - mother relationships. Journal of the American Academy of Child Psychiatry. 14, 387-421.
- Grossmann, K, Fremmer - Bombin, E., Rudolph, J., & Grossmann, K.E. 1988 Maternal attachment representation as related to patterns of infant-mother and maternal care during the first year. In R. A. Hinde & J. Stevenson-Hinde (Eds). Relationships within families : 小嶋秀夫 1989 養護性の発達とその意味 小嶋秀夫（編）乳幼児の社会的世界 有斐閣。
- 小坂千秋 2004 幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因—就労形態からの検討— Human Developmental Research 18, 73-87.
- Main, M, Kapan, N & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood : A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters

- (Eds.), Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development, **50** (1-2, Serial No, 209), 66-106.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development, **50** (1-2, Serial No 209), 66-106.
- Main, M. 1991 Metacognitive knowledge, metacognitive monitoring, and singular (coherent) vs. multiple (incoherent) models of attachment: Findings and directions for future research. In C. M. Parkes, J. Stevenson-Hinde, & P. Marris (Eds.), Attachment across the life cycle. New York: Routledge..
- Ricks, M. H. 1985 The social transmission of parental behavior: Attachment across generation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), Growing points in attachment theory and research. Monographs for the Society for Research in Child Development, **50**, 66-104.
- 渡辺久子 2000 母子臨床と世代間伝達、東京：金剛出版.
- Winnicott, D. 1965 The family and individual development. London: Tavistock.
- Winnicott, D. 1968 Infant feeding and emotional development. Maternal and Child Care, **4** (33).